

韓国社会における死をめぐる民俗文化の変容：火葬の増加と葬儀場

著者	秀村 研二
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	69
ページ	31-42
発行年	2007-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00001420

韓国社会における死をめぐる民俗文化の変容 火葬の増加と葬儀場¹⁾

秀村 研二

明星大学日本文化学部教授

はじめに

韓国社会はよく「儒教社会」といわれる。しかしその「儒教社会」の示す内容は必ずしも明確ではない。それでいて朝鮮王朝以来、儒教的なものが社会的規範として実践されているのも確かである。その一つに葬送をめぐる様々な儀礼がある『朱子家礼』に基づいた葬礼が伝統的な葬礼とされ、それを実践し成し遂げることが理想とされてきた。もちろんこのような儒教的な伝統の受容には濃淡があり、それが一様に実践されてきたわけではない。しかし近年に至るまで、実際のおこなわれ方は多様であったにせよ、葬礼は儒教的な儀礼の形式を多く受け入れた形で実践されてきたのも事実である。

本稿で取り扱おうとするのは韓国社会における1990年代半ば以降の近年の葬礼の変化についてである。1960年代に始まった高度経済成長にともなう都市への人口集中、産業化はさまざまな変化を韓国社会にもたらしたが、儀礼そのものについては1980年代前半頃まではさほど大きな変化は見られなかったということができよう²⁾。葬送儀礼の変化に関していえば1990年代半ば以降に変化が顕著になってきたと考えられる。それは火葬率の急増と葬儀場での葬儀が一般化したことに端的に現れている。この二つの点は、伝統的な韓国人の死生観では忌むべきことであった。つまりそれは埋葬されないこと、そして家で葬儀がなされないことを意味していたからである。

伝統的には次のような死が望まれる死だった。それは特に悪い病気にかかることもなく老衰して自宅で子供たちや孫たちに見守られながら死ぬことである。逆に望まれない不幸な死は、親より早く死ぬこと、客死、事故死、疫病で死ぬこと、未婚のまま子孫を残さずに死ぬこと、自殺などであった。特に未婚のまま女性が死ぬとモンダル鬼神になるとして恐れられた。このような不幸な死に対しては儒教の形式によっては葬儀がおこなわれず、また祭祀の対象にもならなかった。そのためムーダンがおこなうクッなどの民俗宗教(巫俗なども呼ばれる)による儀礼によって、死者の霊をあの世に送り届けることが必要であった[崔吉城1985]。つまり幸福な死(問題の無い死)は儒教の形式によって葬礼がおこなわれ、不幸な死(問題のある死)の場合には民俗宗教によっておこなわれるという相互補完的な関係が成り立っていたことになる。

特に疫病で死ぬことは不幸なこととされ、埋葬はされずに火葬され、墓は作られずに

散骨された。このため韓国社会では火葬を否定的に捉えることが多く、火葬を忌避する傾向も強かった。また近代においては、墓を作るだけの余裕のない都市の貧民層が火葬を選択せざるを得なかったことも火葬を否定的に見る見方につながっていたと思われる。ただし少数ながら仏教徒の一部や仏教の僧侶は火葬をすることがみられた。しかし朝鮮王朝においては、新興の官僚層であった士大夫たちがそれ以前の高麗王朝の仏教保護に対して、新しい統治理念として朱子学を用いて崇儒抑仏政策をおこない『朱子家礼』に基づいて儀礼を定め、火葬は禁止されることになった（1470年）。朝鮮王朝時代を通じて、またその後の日本による植民地支配の時期を通して、儒教的規範は韓国社会に広く受容されることになり、そのため火葬をせずに埋葬をする葬法が一般化したと考えられる³⁾。

日本による植民地統治期には共同墓地や火葬場が作られ、そのため火葬は都市では増えはしたが一般化はしなかった。また火葬に対する否定的な面も消えることはなかった⁴⁾。植民地からの解放後は、火葬は日本の葬法であるという認識があり、それに対する反発もあって火葬率は低くなっている。韓国の歴代政府は国土の有効利用という観点から埋葬を減らし火葬を増やそうとしたのだが、近年まで成功することはなかった。1961年に定められた「埋葬と墓地などに関する法律」は1968年、1973年、1981年に保健衛生面と国土の効率的利用の観点から改正はされたが、実際にはほとんど何の影響を与えることも出来なかった。しかし1997年以後、墓地の単位面積の縮小、墓地使用期間の制限、火葬及び納骨制度の普及拡大などを骨子とした法律の改正案の論議が推し進められ、1999年9月に改正され2001年1月に「葬事等に関する法律」として施行されることになった。このような改正が可能となったのも1990年代後半の、葬礼に関するさまざまな意識の変化が背景にあったためだと考えられる。

1 葬送儀礼の変化——火葬率の増加

韓国における葬送儀礼の変化を象徴するものが火葬率の増加である。前述したように少なくとも伝統社会において火葬は、不幸なまた望ましくない葬法として忌避されるものであった。（表1）のように火葬は1990年代後半から増加をし、現在では全国平均において53%と半数を超え、都市部においては、それも大都市部ではソウル65%、釜山75%のように高い率を示している⁵⁾。忌避されていたものが、わずか10年あまりで受容されたのは何故であろうか⁶⁾。

その理由の一つとして語られるのが、韓国の代表的なグループ企業の一つであるS K（鮮京）グループ会長、崔鐘賢氏の死であった。彼は1997年に死亡するのだが、遺言として火葬を希望し、その遺志に沿って遺体は火葬に付され遺骨は墓に納められた。それを契機として謂わば上からの運動として、政府とマスコミが一体となって火葬推進運動

表1 ソウル市民の埋葬、火葬の変化 [한국행정학회 2003]

年度	死亡者数	火葬数 (率)	埋葬数 (率)
1971	24,903	10,944 (43.9)	13,959 (56.1)
1976	28,731	11,584 (40.3)	17,147 (59.7)
1981	31,705	10,461 (33.0)	21,244 (67.0)
1986	34,751	9,310 (26.8)	25,441 (73.2)
1991	38,536	9,293 (24.1)	29,128 (75.9)
1996	37,483	12,044 (31.3)	25,135 (68.7)
1997	38,023	12,363 (32.5)	25,135 (67.5)
1998	37,547	13,600 (35.9)	23,973 (64.1)
1999	37,547	15,746 (41.9)	21,828 (58.1)
2000	38,815	18,732 (48.3)	20,083 (51.7)
2001	37,979	20,478 (53.9)	17,501 (46.1)

というべきものが繰り返されることになる。それは大グループ企業の会長のような社会の指導的役割を担う人物が火葬をしたのだから、社会の指導的な役割を担う人々は見習わなければならないとも言えるような運動でもあった⁷⁾。それは次のような新聞記事の見出しにみてとれるであろう。例えば「指導層から火葬の遺言を」[世界日報1999年1月18日]、「火葬して欲しい、指導層を中心に拡散」[ハンギョレ新聞1999年9月16日]、「火葬運動は指導層が先頭に立たなければならない」[ハンギョレ新聞1999年9月20日]などである。

ソウル市は市立の公園墓地において新規の埋葬を認めない。つまり安価な市立墓地を利用するためには火葬でなければならない。そのために火葬場の炉の数を増強し、設備も近代的で機能的なものとした。そして火葬した遺骨を納める場所として納骨堂を市立墓地に作った(2000年4月29日に「第2追慕の家」が完成)。また納骨堂に拒否感をもつ人々のために、数人から20数人までの遺骨を納めることが出来る家族納骨墓も新しく作られた⁸⁾。もちろん業者の手によって開発された私立の公園墓地を利用するならば埋葬は可能である。しかし先にも述べたように法律の改正によって、埋葬は15年間であり、最大に延長しても60年後には火葬して改葬しなければならなくなった⁹⁾。いわば出口を塞ぐことによって、火葬へと誘導しているのである。

また火葬率の増加による墓の形式の変化は、業者に新しいビジネスチャンスをもたらしたことになる。納骨のためのスペースを設けた様々な形の墓や大規模な納骨堂などが作られ、骨壺も多様な商品が開発された。テレフォンショッピングに納骨墓地が登場したが[朝鮮日報1999年9月6日]、便利さや快適性をキャッチコピーとするところは、アパートなどの住宅の売り込みと大差がないのである¹⁰⁾。

しかし、いくら政府とマスコミが上からの運動を繰り返したとしても、人々の心にある火葬への拒否感が無くならない限り、このような火葬の増加が可能であったとは考えられない。ソウル市の場合には火葬場や市立墓地、納骨堂などを運営する外郭団体としてソウル市施設管理公団があり、そこでは火葬や納骨などの葬送一般について相談する

窓口を設けている。ソウル市の中心部に位置するこの窓口には電話での問い合わせも多いが、老人たちが直接に相談をしにもやってくる。その老人たちに直接話しを聞いてみると次のようなことが語られる。「子どもたちに自分の墓のことで心配をかけたくない。火葬にして納骨堂にでも入れてくれればと思う」。「子どもたちは皆結婚して独立していて、現在は自分たち夫婦だけで住んでいる。現在でも祖先の墓参りに子どもたちは同行しないことが多い。普段でも顔を見せない子どもたちが墓参りをしてくれるとは思えない。それだったら火葬にして行くのにも便利のいい納骨堂にでも入っていた方が、子どもたちが思い出して来てくれるかもしれない」などという。もちろんこの窓口は火葬の相談のために開設されているのだから、そこに来る老人たちは火葬に対しては少なくとも肯定的だと思われる。ただ他の場所で老人たちに火葬について尋ねても多くは同様の答えであった。つまり子どもたちに墓地や墓参りのために負担をかけたくないというのである。

老人たちは積極的ではないにせよ火葬を受け入れているようであるが、それはいわば諦めという側面が強いように思われる。一方で若い世代は火葬に対して忌避感あまり無いようである。ある50代の夫婦は、「夫の母親は火葬を嫌がっているが、自分たちは火葬して納骨堂に入れるなり散骨をするのが良いと思っている。墓などに高いお金を使うよりは他に有益に使った方が良いのではないかと母親を説得している」と語った。若い世代の火葬や散骨に対する拒否感の低さは、映画やテレビドラマで流される散骨のシーンなどと関連しているかも知れない。例えば1998年の映画興行成績1位であった映画『ピョンジ(手紙)』は夫婦の愛情を描いたものだが、その中で散骨をする場面が印象的に取り上げられていた。

2 死を迎える場と葬送の場の変化

火葬率の増加とともに1990年代に顕著になった変化が葬送の場である。前述のように望まれる死とは家で家族に看取られながら逝くことであり、葬儀は家でおこなわれることであった。だからたとえ病院に入院していても死期が近くなると家に帰って死を迎えようとし、それが当然のこととされていたのである。それが現在では死ぬ場所は病院が多くを占め、自宅で葬儀がおこなわれることは少なくなっている。自宅以外で死ぬという、かつては忌避されていたことが、火葬と同様に逆に現在では一般化しているのである(表2)。

これには都市化による居住形態の変化が関係しているかも知れない。韓国では冬の暖房の問題もあり、アパート(日本でいうマンション)などの集合住宅が好まれる。高層の集合住宅が多く建てられ、上層階への移動には共用のエレベーターが使用される。しかし死んだ人の屍体の搬出はエレベーターを共有して使う人々が嫌うのでエレベーター

表2 葬場所の変化 [李顕松・李必道 1995] ¹¹⁾

場所	1985年	1989年	1992年	1995年
自宅	235 (75.3%)	294 (60.4%)	416 (50.0%)	297 (37.5%)
病院	61 (19.6%)	172 (35.3%)	379 (45.6%)	480 (60.6%)
その他	16 (5.1%)	21 (4.3%)	37 (4.45%)	15 (1.9%)
合計	312	487	832	792

を使用することが出来ない。そのためベランダなどから搬出することになるのだが、上層階であるとその作業も大がかりなものとなる。特に近年増えてきた高層マンションでは、外部からの搬出それ自体が難しい。そのようなこともあり、現在では臨終が近づく病院に移動させ、病院で死を迎えることが多くなった。

以前は病院に入院していても死期が近づくと、何とか自宅に連れて帰って自宅で死を迎えさせようとした。それと全く逆のことが現在では起こっているのである。現在は病院に入院している場合には、そのまま病院で死を迎えることになる。つまり伝統的には忌まれていた客死が一般化しているのである。現在ではたとえ病院で死んでも、それが客死であるという意識はほとんどないほど普通の死になってしまったといつて良いであろう。また自宅で死亡したとしても自宅で葬儀をすることは少なく、多くの場合には屍体は後述の病院付属の葬儀場か、専門葬儀場に移されることになる。

家で家族に看取られながら死んでいったのに対して、現在では病院で医療スタッフの治療を受けながら死んでいくことになる。かつては看取るといことで主体的に行動することが出来た家族は、今は全てを医者任せに任せるより他はない。慣習的におこなってきた様々な臨終の儀礼は、そこに入り込むこともできないのである。

前述のように、あまりにも病院での死が一般化してしまったためか、自宅以外での死を客死とみなし、不幸な死であるがゆえにその死霊が周囲の人々にとって災いとなるといった観念はそこに見ることは出来ない。そのため、かつては民俗的な概念では客死とされて葬儀の対象とならなかったこのような死者たちが、正常な死に方をした場合に適用される葬儀様式でもって送られることとなっている。

死ぬ場所の変化とともに葬送の場も大きく変化した。現在の韓国で葬儀の場として一般的なのは病院付属の葬儀場である。病院が葬儀場まで経営しているのは葬礼をめぐる韓国的特徴の一つであるといつて良いかもしれない。前述のように病院で死ぬことはかつては客死であり、自宅では葬儀をすることが出来ない異常な死だと考えられていた。そうではあるとしても何らかの儀礼はおこなわなければならない、その場として利用されたのが病院の霊安室であった。ある程度の規模以上の病院には屍体の一時的保管の場所として霊安室があるが、そこが出棺（韓国ではパリン（発靱）という）までの間、家族が死者を守り訪れる人の弔問を受ける場となった。つまり霊安室が葬送の場になっていったのである。そこに葬儀業者が介在するようになり、葬儀の場として様々な利用が

なされるようになるが、葬儀業者による葬儀料金は多くの場合は透明性はなくトラブルは絶えることはなかった。霊安室での葬儀はあまり良いものとして認識されていなかったといえよう。葬儀社が要求する料金については社会問題化し、テレビなどのマスコミで取り上げられることもしばしばであった。

そのような負のイメージを一変させることになったのが1990年代半ばに新しく開業した大病院であった。特に影響があったと言われるのが、1994年にオープンしたサムソン医療院である。この病院では従来の葬儀業者を介在させず、それ以前の霊安室にはみられなかった形態である病院付属の直営葬儀場としたことが画期的であった。それまでの韓国にはなかった豪華な雰囲気をもった大きな葬儀場の登場は、中産層の増加という当時の社会の流れに沿うものでもあり歓迎された。病院側からするならば、新しい収入源を見いだしたと言えるかも知れない。

サムソン医療院に続いて、ソウル大学病院、現代アサン病院、延世大学セブランス病院など韓国でも有数の大病院では葬儀場の直営化に乗り出していった。これは消費者側の要求にも応えるものでもあった。先述のようにそれまで必ずしも明確でなかった料金が透明化され、施設が改善され良い雰囲気の中で葬儀を執り行うことが出来るようになったからである。これらの大きな病院で各界の著名人たちの葬儀がおこなわれるようになり、そのためもあってか、これらの大病院で葬儀をおこなうことが一つのステータスとみなされるようになった。

このような葬儀場のあり方を私が調査をしたソウル市東部に所在する中規模のK大学病院付属の葬儀場を例として簡単に見てみよう¹²⁾。近年に新しく作られた韓国の葬儀場は病院付属のものも、また後述する専門葬儀場も基本的に施設の内容は規模に違いはあっても大きく異なることはない。このK大学病院付属葬儀場は2000年に建築された中規模の葬儀場である。施設としては祭壇を設け遺族が弔問客の応対をおこなうピンソ(殯所)が大小合わせて13あり、それに弔問客に食事などの接待をする応接の場がある。また殯所に隣接して遺族が泊まり込むためのバス付きの寝室も用意されている¹³⁾。

K大学病院内で死亡した場合には、遺体は病院から専用の通路で運ばれ、また外部からの遺体も棺に入れて保管室にある16個の冷蔵庫の中に納められる。冷蔵庫はお棺のまま入れられる大きさであり、特にその内4台は海外から運ばれてくる大きな柩にも対応できるよう大きいサイズである¹⁴⁾。保管室に隣接して遺体の湯灌(韓国語では遺体を清めた後、死装束であるスウィ(寿衣)を着せてヨムポ(殮布)で縛る一連の作業をヨムスプ(殮襲)という)をおこない入棺する作業を行う部屋がある。その一部分は大きなガラス窓で隔てられた別室になっており、遺族たちはその部屋からガラス窓越しにヨムスプがおこなわれている光景をみる。希望があれば遺族が殮襲つまり湯灌をおこなうことは可能であるというが、実際のところはすべて葬儀場の葬儀士(葬礼指導士)に任せることが大多数だという¹⁵⁾。入棺を済ませると遺体は柩ごと冷蔵庫に入れられ出棺の際

におこなわれる儀礼であるパリン（発鞠）まで保管される。つまり遺族がいて弔問客が訪れる殯所には、故人の遺体は安置されていないのである。これを霊安室時代に始まった「伝統」であるという葬儀場関係者もいた。

葬儀場には他に、管理部門としての事務室、葬儀用品の販売をおこなう店、日用品の売店、花屋、弔問客への接待の食事などを供給する厨房や食堂などがある。葬儀用品の販売は直営の場合とK大学病院付属葬儀場のように専門の業者をテナントとして入れている場合がある。取り扱われる品物は葬儀に必要なもの全体にわたるが、大きな部分を占めるのが柩と寿衣である。柩は様々な材質のものがあり価格も異なるが、火葬の増加とともに、「どうせ焼くのだから」という理由で高級品は売れなくなってきており、価格の低いものの方が良く売れるという。

同様に死装束である寿衣も様々な材質と価格の設定がなされている。埋葬の場合には骨から肉が落ちるユンダル（肉脱）が良くできるためには、安東布（安東地方の高級麻）で出来た寿衣が良いとされていたが、火葬の場合には安価なもので構わないという遺族が多い。また火葬の増加とともに遺骨を納める骨壺も様々な商品が開発されてきている。ただの陶器の壺から、様々な高級石材を使ったもの、螺鈿細工を施したものなど多岐にわたる。

事務室では受付をおこない、また料金表を示しながら殯所や食事、霊柩車などの手配をおこなう。多くは三日葬（死亡して三日目に発鞠をして埋葬ないし火葬をおこなう）でおこなわれる。事務室では受け付けた内容に従って、葬儀場に二箇所ある入り口の電光掲示板に、ピンソ（殯所）番号、故人、喪主の姓名、パリン（発鞠）日時、埋葬・火葬の場所が掲示される。

K大学病院付属葬儀場にはパリン儀礼をおこなうための部屋はない。敷地の関係上、設置できなかったという。それで出棺用の玄関の空間を利用して儀礼がおこなわれる。他の葬儀場では別途に発鞠儀礼をおこなうための部屋を用意するのが一般的である。ピンソやパリンのための部屋を含めて、韓国では仏教、キリスト教（プロテスタント）、天主教（カトリシズム）と明白な宗教意識をもって葬儀をおこなうことが多いので、各宗教に対応できるように注意が払われている。

特定の宗教を信じていない場合には通常、伝統といわれる儒教的な形式でもって儀礼がとりおこなわれることになる。その場合、遺族や親族の中に儀礼に詳しい人がいればよいのだが、いない場合には葬儀社の葬儀士の指導のもとに儀礼が執り行われる。かつて家でおこなわれていた葬儀の場合には、儀礼は儀礼に詳しい人が指導しながらおこなっていた。当然ながらそこには各地方や家門ごとにやり方が異なり、多様性がみられた。しかし現在の韓国で一般化した葬儀場でおこなわれる大部分の葬儀は、専門の葬儀士の指導のもとにおかれ、家族たちが主体的に振る舞う余地は多くはない。一つ一つの儀礼の意味を説明し、そのおこない方を指導する葬儀士は、韓国葬礼業協会認定の資格

保持者（葬礼指導士）である。現在ではこの資格無しには殮襲などを含む葬儀の実務はおこなえない。このような葬儀指導士の主導のもとにおこなわれる儀礼は平準化したものとなるより他はないであろう。例えば韓国葬礼協議会では、葬礼者の技能や知識の向上のために研修教育をおこなっているが、その中では葬儀関係法令や公衆保健と並んで民俗学的な葬礼の解説もおこなわれている。そのような教育に携わるのも民俗学者である [金時徳2003]。

葬儀士は、かつては否定的に見られる職業だった¹⁶⁾。それが1990年代からの新しい病院付属葬儀場の登場などで近年はイメージが変わってきている。韓国にはこの葬礼指導者育成のための専門の課程を持った学科が一つの大学と三つの専門大学（短大）に置かれている。就職率が良いため受験生の人気は高く、また学生の半数近くが女性であるのも特徴である。卒業生の就職先は、葬儀場を主として、葬儀関連産業の多岐にわたるといふ。その中で実際にヨムスプなどの実務をおこなう女性もまだ少数ではあるがでてきた。これまで男性中心の職場であった葬儀士の中に新しい葬礼指導士の資格をもった女性たちが進出しているのである。それは故人が女性であった場合、ヨムスプを男性がおこなうことに対して遺族の抵抗があるためといわれる。ここにも葬儀の場所の変更による変化がみてとれる。かつて自宅で葬儀をおこなっていた時に故人が女性の場合には、嫁がヨムスプをおこなっていたからである¹⁷⁾。

葬儀場での葬礼が増えたことによって、都市近郊では専門葬儀場と呼ばれる病院の付属ではない単独の葬儀場が増えてきている。韓国では葬儀関連施設への忌避感が強いので、街の中に作ることは無理である。それで将来の都市化も見こんで都市の近郊に作られている。施設などは病院付属のものと同様であるが、料金は比較的安く設定されている。それまで葬礼とは全く関係がなかった異種業者からの新規参入が多いという。

3 グローバル化の中の葬送の変化

韓国の近年の葬送文化の中で変化が大きな、埋葬から火葬へという屍体処理の問題と、病院での死と葬儀場での葬礼という場所の問題とについて取り上げた。繰り返しになるがこの二つの問題は、ともに伝統的な死の観念とは異なるものである。

死を迎える場所は自宅から病院へと移り、客死であるにもかかわらず正常な死と同様に葬儀がおこなわれる。また葬儀もかつての自宅から現在では病院付属などの葬儀場でおこなわれることが多く、おこなわれる場としては伝統的規範からするならば正しくはない。葬儀の場所の変化はまた家族の果たす役割の低下を意味し、主体的な立場からは追いやられている。また屍体の処理も埋葬ではなく火葬が急増しており、これも伝統的規範では忌避されるものであった。そしてこの火葬の急増には上からの運動とも言うべき政府とマスコミの運動があった点は注意されてよいであろう。このように近年韓国で

進行している葬儀をめぐる大きな変化は、伝統的規範においては忌避されていたものの受容であるといえることができるであろう。

この変化には東アジアの他の地域と共通してみられるものと、また韓国に固有にみられるものがある。土葬から火葬への移行は日本でも見られた現象であり、また最近では中国 [渡辺2001] や沖縄 [加藤2001] など東アジアの近隣社会で起こっている現象でもある。葬儀場の問題は都市化の問題としても考えられるであろう。一方で病院で葬礼をおこなうという病院付属の葬儀場の存在は韓国における特徴的なものといえることができるであろう。

葬儀場や火葬場の施設には日本のものが取り入れられていることがある。葬送文化が変化していく中で、日本に多くの関係者が訪れ見学をおこない施設を参考とした。ただ儀礼のやり方や使われる用品は伝統的なものがほとんどである。納骨堂は日本だけではなくヨーロッパや北米のものまでが参考とされている。

ソウル市では現在市立墓地における納骨堂の新たな建設をおこなっていない。実際のところ火葬の急増によって納骨堂の利用が増え、納骨堂を建て続けなくてはならなくなった。土葬の墓は祀り手がいなくなり管理されなくなると自然に帰っていくが、コンクリート製の納骨堂はそのままである。そのような環境問題の観点からも納骨堂の新規建設は見送られ、ソウル市では散骨を中心としたものに誘導しようとしている。現在は市立墓地の中に散骨をするための区域を設けているが、散骨をしてしまうと故人を記念するものが何も残らなくなるため普及は当局が意図するようには進んでいない。そこで新たに注目されているのがスイスなどヨーロッパでおこなわれている樹木葬である。ある広さの山林を散骨の区域とし、特定の木を故人と結びつけてその根元に散骨しようとするものである。しかし環境との問題もあって反対もあり、法的措置を得られず、実施はされていない。

このような火葬を中心とした政策に対しては、伝統的な家族関係を破壊するなどの批判が絶えない。しかし埋葬が個人を単位としておこなわれるものであったことを考えるならば、家族墓として骨壺を複数納骨できるものや、より広く20数人まで納骨可能な親族墓などは新たな家族や親族関係の確認を求めているものなのかも知れない。

また自宅で死を迎えず、自宅で葬儀をしないことにより家族の主体的な役割が弱くなっていることについて指摘した。この点は韓国に特有の現象とはいええないであろう。専門の業者に相応の報酬を支払うことによって任せることにより、家族が中心的な役割から周辺へと位置を変えているのである。これには親族の紐帯や村のつきあいの変化が関係しているであろう。現代の都市にはそのような繋がりは望むべくもなく、また非都市部の村落においても、急激に進行した過疎化と高齢化は、村落部においても伝統的な葬礼の実施を困難なものとしてきている。例えばサンヨ (喪輿) の担ぎ手がいなかったために喪輿自体を処分してしまった村もある。

本稿では葬送のあり方の変化に注目したため、そのような変化を受け入れた人々の死をめぐる観念の変化について十分に触れることが出来なかった。今後の課題としたい。

注

- 1) 国立民族学博物館での共同研究「グローバル時代の韓国研究」における発表「韓国における葬送儀礼の変化——火葬の急増を中心に——」(2003年12月13日)と第38回日本民族学会で「火葬：韓国社会はどのように受容したか」と題した発表(2004年6月4日於東京外国語大学)をもとにしている。発表に際して質問・ご批判をいただいた方々に感謝を申し上げる。
- 2) これは大きな変化を経た後の現在から見た議論であって、1980年代前半には近代化によってどれだけ大きく社会や文化が変化したかが議論されていた。
- 3) もちろん葬法が一律に埋葬であったわけではない。例えば全羅道では草墳(草葬)という一次葬がおこなわれていたが、それは死体を草で覆って肉体が腐って骨だけになるのを待ち、その後墓を作ることであった。
- 4) 植民地期の墓地問題については[高橋:2000, 2003]に詳しい。
- 5) 保健福祉部発表の2005年度火葬率調査結果, 朝鮮日報2006年10月2日。
- 6) その前兆ともいえるものに1990年代になって相次いだ豪雨による墓の流失があげられるかも知れない。業者による乱開発で山の斜面に作られた公園墓地が豪雨により流失し、遺体や遺骨が散乱する様子が報道されたのだ。これは火葬であればこのような遺体の散乱はないというネガティブ・キャンペーンであったともいえよう。また衛生の問題でもあったと捉えることができる。
- 7) 火葬推進のために社団法人韓国葬墓文化改革凡国民協議会のような団体が作られ、さまざまな運動を展開させた。
- 8) 夫婦が合葬されることはあったにせよ、伝統的には墓は個人のものであったことを考えると、家族やそれを超える親族と一緒に葬られる墓は新しい形式である。門中などの親族集団が一つの墓域に共同墓を作ることはあるが、それでも一つ一つの墓は基本的には個人が単位で埋葬される。
- 9) ヨーロッパ諸国の墓地の使用年制限をモデルとしたようである。
- 10) これに対して近年の散骨に対しては利益が上がらないためか業者側からの積極的な発言はないという[ソン・ヒョンドン2004:146]。
- 11) 『朝鮮日報』の計報欄に掲載されたものを分析したもので、地域は特定できないが、全国紙という新聞の特徴から考えるならばソウルを中心とする首都圏が多いと予想される。[李顕松・李必道 1995]
- 12) K大学病院では組織上の正式名称を葬儀室としているが、対外的には葬儀場である。
- 13) ただし価格が低い小規模の殯所には客に食事を接待する場や寝室は付かない。
- 14) 韓国は北米を中心として多くの移民を出しているが、遺言や遺族の意志で故国に帰って葬儀がなされ埋葬されることが少なくない。このようなところにも現代韓国社会のグローバルな側面が現れている。
- 15) かつてのように家で死んで、家で葬儀をおこなう場合には、家族が親族や地域のよく知っている人の指導のもとに殯襲をおこない入棺させていたという。病院での死と同様に、殯襲においても家族は主体的な役割をおこなうことはなく葬儀社がそれを担っている。

- 16) 以前から葬儀士をやっていた中年の男性は、以前のような差別が無くなり一つの職業として認められ誇りを持って仕事が出来ることが嬉しいと語った。そして新しい葬儀文化を創り上げるのだと希望を述べてくれた。また伝統社会において葬儀に携わった人の記録として [金明 1982:145-167], [李相龍1988:45-65] は興味深い。
- 17) また欧米でおこなわれているようなエンバーミングを施して屍体を保存する技術などをもつ葬儀士もいるが、韓国では伝統的に肉体そのものより骨に関心が払われてきたので今のところその需要は高くないようである。

文 献

崔 吉城

1986 『韓国の祖上崇拜』 礼典社, (重松真由美訳 1992 『韓国の祖先崇拜』 お茶の水書房)。

한국정묘문화개혁범국민협의회

2003 『서울 葬墓施設』 (韓国葬墓文化改革凡国民協議会)。

한국행정학회

2003 『서울시 제 2 화장장 (추모공원) 건립 관련 타당성 검토』 (韓国行政学会2003 『ソウル市第2火葬場 (追慕公園) 関連妥当性検討』)。

加藤正春

2001 「焼骨と火葬——南西諸島における火葬法の需要と複葬体系」『日本民俗学』 228号, 日本民俗学会, pp.1-34。

金 明呻

1982 「魂を鎮める喪興の挽歌」安宇植編訳『アリラン岬の旅人たち——聞き書き朝鮮民衆の世界』 平凡社, pp.145-167。

金 時徳

2003 「喪葬礼——神柱の有別によって変わる葬礼」『2003年度 葬礼指導者資格賞保持者保守教育』, 社団法人韓国葬礼業協会, pp.53-77。

李 相龍

1988 「死装束させる殮匠60年の生涯」安宇植編訳『続・アリラン岬の旅人たち——聞き書き朝鮮民衆の世界』 平凡社, pp.45-65。

李顯松・李必道

1995 『葬儀制度의 現況과 發展方向——葬礼式場을 中心으로』 韓国保険社会研究院。

송 현동

2004 「한국장례연구의 경향과 과제」『한국문화인류학』 37卷 2号, 한국문화인류학회, pp.147-182 (ソン・ヒョンドン 「韓国葬礼研究の傾向と課題」『韓国文化人類学』 37-2, pp.147-182)。

高橋良平

2000 「共同墓地を通して見る植民地時代のソウル——1910年を中心に」『ソウル学研究』 15号, pp. 131-165 (韓国語)。

2003 『植民地期朝鮮および大韓民国における墓地問題の展開過程』 京都大学博士学位請求論文。

渡辺欣雄

2001 「<研究ノート>中国の墓地造営と『青山白化』問題——温州レポート」『民俗文化研究』

第 2 号, 民俗文化研究所, pp.55-61。